

公開講演会（岡山大学文学部・岡山大学大学院社会文化科学研究科・岡山大学法学部共催）
「自由民権運動における「平等」概念の再検討」

日時：2008年3月7日 14:00-16:00

場所：岡山大学社会文化科学系総合研究棟 共同研究室

講演題目：「自由民権運動における「平等」概念の再検討—中江兆民『三酔人経綸問答』
の読解を通して」

講演者：クリスチヌ・レヴィ（ミシェル・ド・モンテーニュ＝ボルドー第3大学・日本
学術振興会外国人招聘）

参加者：25名

講演要旨

本講演は、「平等の理想：兆民とらいてう」と題する、レヴィ氏による連続講演会の第2日目にあたるものであった。講演は日本語で行われたが、事前にフランス語の原稿が送られ、それを本学教員・学生が協力して和訳し、あわせて資料も準備し、当日配布された。

講演当日は、本学関係者のみならず、多くの一般聴講者が出席し、盛況であった。講演に先立ち、春名研究科長より挨拶が行われた。

本講演の目的は、兆民の著作『三酔人経綸問答』に見られる平等観が、不平等社会と呼ばれることもある現代日本の諸問題を理解する上で、どの程度有効であるのか、探ることであった。同時に、日本の平民主義、社会主義の運動に対して、従来から指摘されているキリスト教の影響にも増して、自由民権運動の影響も強いことを示すことにも重点がおかれた。

講演ではまず、仏教、キリスト教や、特にモンテスキュー、ヴォルテールなど17、18世紀フランスの思想家の考え方を参照しながら、「平等」という概念の定義を確認し、「平等主義」（最低にあわせて均等化するため、個人が能力を十全に発揮することを妨げるものであるとされる）との違いを検討した。

続いて、日本近代史における平等と平等主義に対する考え方が、自由民権運動、大正デモクラシー、戦後民主主義という流れの中でどのように変化したか、また現代においてどのような課題が残っているか考察した。

そして、そうした現代の課題に取り組む上で、『三酔人経綸問答』にみられる兆民の平等思想は、どのような意義をもつのか検討した。特に時間をさいて考察されたのは、国際関係は平等でありうるのかという問題を巡る、豪傑君（富国強兵・植民地政策を唱える）と、洋学紳士君（小国主義・アジア諸国との隣国交際を唱える）の議論に関してであった。そしてこの両者をとりなすように見える南海先生の立場に、二つの路線のあいだで、小国主義をふまえて19世紀後半の国際政治情勢の現実を見据えようとした、兆民自身の葛藤が見られるのではないか、という主張がなされた。

最後に、兆民はそうした民主・平等の思想をどのように広めようとしたのか、『選挙人めざまし』、『統一年有半』をもとに検討された。

レヴィ氏の講演の後、司会の小畑教授より、近現代政治思想研究史の大きな流れの中で、レヴィ氏の見解はどのように位置づけられ、どの点で独創性が見られるのか、詳細な報告がなされた。続いて質疑応答に移り、特に『三酔人経綸問答』の三人の登場人物、豪傑訓、洋学紳士君、南海先生のどの見解に、兆民自身の見解が投影されていると考えるべきかを巡って、大学院生も交えて熱のこもった議論が行われた。